

つくば日中協会ニュース

(筑波日中協会会報) 第13号

No. 13 (2008.9)

発行：つくば日中協会

事務局：〒305-0031 茨城県つくば市吾妻4-13-21 (川久保方)

Tel&Fax 029-851-4619



祝

つくば日中協会設立15周年!

ご挨拶

つくば日中協会ニュース (第13号) 発行によせて

つくば市長 市原 健一

つくば日中協会名誉会長

つくば日中協会ニュース第13号の発行にあたり、ごあいさつを申し上げます。また、本年12月につくば日中協会が設立15周年を迎えられますことに、心からお祝いを申し上げます。

現在、つくば市には129カ国・地域出身の7,148人の外国人が居住し、そのうち中国の方が2,329人と群を抜いて多い人数となっております。

つくば市は、平成16年6月に広東省深圳市と友好都市提携をし、青少年交流や市議会・市職員による行政間交流をはじめ、最近では産業・経済関係の交流も始まり、ますます交流が活発化しております。深圳市の駐日経済貿易代表事務所設置を機に、平成18・19年度につくば市産業フェアに深圳市のブースが出展されたところでもあります。

また、この8月には北京で第29回オリンピック競技大会がありました。テレビ等による連日の競技の放送や北京等開催国中国の街中の中継が増え、国民一人ひとりがそれらの情報に直接触れることができたと思います。このように、最近では日本でも少しずつ生の中国を知る機会が増えてきました。

かつて「国際交流」と言えば、「文化交流・海外視察」が重要視されていましたが、最近では「多文化共生社会の構築」がキーワードとなってきています。様々なバックグラウンドを持った誰もが住みやすいまち・つくばを目指すために、名実ともに国際都市つくばになるためには、まず、それぞれがお互いの文化や歴史・言語・価値観等を知ることが大事だと思います。すぐには理解できなくても、お互いの違いを認識するということが必要です。そのためにも市では、国際交流員という英語と中国語を母国語とする方を市民生活部国際文化課内に配置したり、多言語による広報紙やゴミカレンダー・保健関係情報冊子の発行、相談業務を実施しております。また、市内の各研究所・各機関・ボランティア団体等と連携をとりながら外国人支援事業や草の根レベルの活動、また在住外国人・つくば市民への啓発活動が必要であると考えております。そのような状況の中、つくば日中協会では、中国料理教室・中国語講座・忘年会・筑波山登山・ニュース発行・ホームパーティー等、草の根レベルでの幅広い活動を通じ、両国の親善友好に大きく貢献されています。これからも日中友好の架け橋としてのさらなるご活躍をお願いいたします。

最後になりましたが、つくば日中協会の今後ますますのご発展と、会員の皆様方のご健勝をお祈りしまして、ごあいさついたします。

ご挨拶

つくば日中協会 会長 不破 正宏

つくば日中協会も名誉会長はじめ会員諸氏のご支援・ご協力により、本年12月に設立15周年を迎える事になりました。有り難く感謝いたします。今年は、中国語講座開講1ヶ月後の5月に中国四川大地震の悲報に触れ、また、8月に世紀の祭典である第29回“夏季奥运会”が北京で開催されるなど、中国の人々と心を共有できる機会も多く、「日中両国の相互理解を深め、協力関係の強化と相互扶助関係の具体的発展を目的」として活動の場を拡げてきている当協会と致しましても、非常に強い印象を残す年となることと思われます。これも、あらゆる場での皆様様の不断のご精進と関係各位の温かいご理解・ご支援の賜物であると、心から御礼申し上げます。

さて、今回のニュースは、緊急報告あり、また多くの寄稿ありで、大変内容の深い読み応えのあるものが出来上がったと自負しております。発行が予定より少々遅れましたことをお詫び致しますが、どうぞご一読下さい。

緊急報告中国四川大地震

2008年5月12日 中国四川省を震源とするM7.9の地震が発生しました。

つくば日中協会では、協会として50,000円の見舞金を献金するとともに、中国語講座受講生へも下記のように募金と呼びかけ、受講生のみなさんから計55,307円の義援金をいただきました。これは、6月8日のつくば日中協会総会の席上において、筑波大学中国留学生学友会代表の楊豪傑氏に手渡しました。これらの寄付金は留学生会から駐日本中国大使館を通じて中国の被災者の方々に送られたとの事です。6月中旬に、中国大使館より、“礼状”と領収書がつくば日中協会宛に届いています。

【呼びかけ文】

中国語講座受講生のみなさま

このたびの中国四川大地震の悲惨なニュースには、みなさんも毎日心を痛めておられることでしょう。

中には、すでに何らかの義援の手を差し伸べておられる方もおありかと思います。

中国四川大地震の被害状況が明らかになるにつれ、その犠牲者は膨大な数に上り、特に、多くの学校崩壊による数多くの若者達の犠牲には胸が痛みます。

大地震の発生から2週間が経って、今なお余震が続き、色々な二次災害の危険にも曝されています。

大自然の前に私たち人間の力はあまりにも小さすぎると感じながらも、この悲惨な災害の犠牲者への哀悼と残された方々への復興支援のために、私たちの小さな力を出し合いたいと思います。

日ごろの日中交歓活動などを通じて、友好を深め合っている筑波大学中国留学生学友会の劉学軍会長からも、別紙の通り、当つくば日中協会宛に義援活動への支援協力の依頼を受けております。

つくば日中協会では、活動予備費の中から義援金として5万円を支出し、筑波大学留学生学友会に寄付することを役員会において決定しています。

みなさまからのご芳志も、別途、中国留学生学友会に託して、中国のみなさんにお届けしていただこうと思います。

6月8日の総会までの間、中国語講座の各コースの教室入り口に募金箱を用意させていただきますので、どうか募金へのご協力のほどをお願い申し上げます。

日本と中国の人々の心に、人間としての感情の共有と共鳴への道が開かれることを願いながら……

平成20年5月27日
つくば日中協会会長 不破正宏

【筑波大学中国留学生学友会からの義援金依頼】

「中国四川・大地震」緊急募金について

中国四川省で12日午後2時28分、マグニチュード8の大地震が発生しました。地震断層のズレは250キロ、その破壊力は「阪神大震災」の30倍です。

18日現在この地震の中で32,000人が死亡、生き埋めが14,000人に達しました。中国政府は死者5万人以上と推計されると発表しました。また被害者の人数は1,000万人も超えました。

筑波大学中国留学生学友会会長劉学軍と同会顧問張振亜准教授が発起人となり、募金活動を行っております。

皆様からの義援金は、中国大使館を通じて現地の救援活動の一助として活用させていただきます。金額の多寡ではなく心を寄せてほしいです。

多くの皆さまからの温かいご支援をお待ちしております。

(問合わせ先等 略)

筑波大学中国留学生学友会
2008年5月18日

案 内

2008年度中国語講座開講中！！

2008年度の中国語講座を開講しました。つくば日中協会会員の中国人講師陣によるご指導とつくば市教育委員会のご後援の下で実施されています。

中国語を学びながら中国文化への理解と日中の市民間の友情を深めましょう。

コース：「基礎」「初級」「応用」「基礎会話」「新漢語」の5コースです。

期 間：平成20年4月15日（火）～平成21年3月13日（金）【全40回】

詳しい日時・会場の案内表は、ホームページ (http://www.geocities.jp/tsuku_nittyuu/) の「中国語講座」から「講座予定カレンダー」でご覧下さい。

2008年9月現在で、延べ64名が受講しています。

報 告

1. つくば日中協会総会報告

平成20(2008)年6月8日(日)10時～11時、つくば市小野川公民館にて、平成20年度つくば日中協会総会を開催いたしました。

開会宣言のあと、筑波大学中国留学生学友会代表として我々の中国語講座の講師でもある楊豪傑氏が挨拶され、中国四川大地震に対するつくば日中協会の募金活動に対して感謝の表明がありました。続いて配布資料に基づき、平成19年度の活動報告・会計報告・会計監査報告が行われ、拍手を持って承認されました。

次に出席役員の自己紹介があり、引き続き王幹事長から今年度活動計画(案)が示され、特に11月中旬に予定している中国旅行は今年度活動の目玉であるため、担当役員である宮島幹事からの説明がありました。今年度予算案の説明の後、質疑応答に入りました。

ここでは、上記の活動計画(案)と予算(案)に対しての協議で、「四川大地震のあった年の中国旅行は自粛すべきではないか」との意見が出され、これに対し、「予定している旅行先の浙江省地方は地震の中心地から2,000kmも離れている場所であり、特にオリンピック後はその地方の人々の心は明るくなっていると思う」との発言がありました。他にも数人の発言がありましたが、おおむね旅行に肯定的な意見で、結局この件は役員会で現地の人々の気持ちを確かめた上で決定するという事になり、予算案と活動計画案は出席者の拍手でもって了承されました。

総会の終了直前に、参加者の立会いの下で、この2週間にわたって中国語講座の各コースで集められた中国四川大地震に対する募金の集計を行い、55,307円であることを確認。この義援金とつくば日中協会からの見舞金5万円を筑波大学中国留学生学友会代表の楊豪傑氏に手渡しました。



2. 中国家庭料理交歓会

1. の総会終了後、同公民館にて、中国家庭料理交歓会を開催しました。

参加者は「包子(指導者:和泉田先生の母上)」、「麻婆豆腐(指導者:王幹事長夫人)」、「トマトと卵スープ(指導者:劉小軍氏)」の3班に分かれ、料理を開始しました。総会開催中



は中国人留学生を中心にして料理は進められ、11時に総会が終わると再び全員で料理に取りかかり、12時から5個のテーブルに分かれて会食となりました。最初に王幹事長の「乾杯」の発声でアルコール無しの飲料で乾杯しました。皆で歓談しながら美味しい料理の会食が一段落した頃、各テーブルから日本人と中国人とが1名ずつ代表になってもらい自己紹介や隠し芸を演じ、西瓜のデザート、そして皆で食器を片付け、14時に終了しました。

3. ホームパーティー報告

留学生をお招きして

(2008/2/13 原稿受理)

つくば日中協会幹事 川村 路子

だいぶ遅くなりましたが、2月2日(土曜日)留学生の皆さんをお招きしてホームパーティーを開きました。

学友会会長の劉さんと奥さんの王さんに昨年12月に赤ちゃん誕生というおめでたい出来事があり、親子ともども落ち着いたところでお呼びすることにしておりました。そして中国からはるばる赤ちゃんの世話に来られたお母さんと、来日1年未満の方々合計6名でした。

その日はたまたま町内会の新春餅つき大会と重なりました。日本の伝統文化に接するのにはちょうど良い機会だと思い、我が家の近くで行われている会場(公園)にお連れして餅つきの体験をして頂きました。

中国では餅つきはしないとの事で、自分でついた餅を食べるのは格別だと喜んでもらえました。餅のほかにも一度に200人分も作れる鉄の大鍋で作った豚汁やお汁粉、焼き芋なども喜ばれました。また大勢の地域住民との出会いなども初めての体験だったようです。

赤ちゃん連れでしたので、会場にはあまり長居せず我が家へ移動して、改めて食事をしながら楽しいひと時を過ごしました。食事の用意も一緒にしたほうが楽しいかなと思っていたので、途中まで作ってあった「ちらし寿司」を皆で盛り付けたり、デザート飾りつけ等も手伝っていただきました。

和室に案内すると、立てかけてあった「弓」を目ざとく見つけたので、以前弓をやっていた夫が詳しく解説してあげると大変興味をもたれたようでした。

また息子の結婚式の写真などを見せたりしているうちに、たちまち時間が過ぎてしまいました。赤ちゃん連れにもかかわらずゆっくり過ごしていただけて、私たちも大変うれしく思いました。私たちは習いたての中国語を使ってみようと思いつつ、皆さんの日本語があまりにも上手なので、ほとんど日本語ばかりでの日中交流となりました。



4. 春節パーティー報告 (筑波大学中国留学生学友会主催)



2008年2月6日(水)夕方6時から筑波大学で筑波大学中国留学生学友会主催の春節パーティーが開催されました。当協会からは会長はじめ4名のメンバーが出席いたしました。茨城県日中友好協会など挨拶から始まりましたが、当協会不破会長の中国語での挨拶には参加中国留学生から大きな拍手をいただきました。そして、中国料理、留学生手作りの水餃子で舌鼓みを打ったあ

とは、ジェスチャーなど楽しいゲームで大いに盛り上がりました。日頃の不勉強が祟って、全く中国語での会話が出来なかったのですが、春節をみなと一緒に祝えたことは、本当に最高の思い出になりました。当日は雨の中にも拘わらず多くの方が集まり、留学生のみなさま、学友会の方々、ご準備が大変だったと思います。ありがとうございました。会終了後、会長と私はテンションの高いまま、竹園公民館での中国語講座(入門)に向かったのです。(中澤記)



『原稿募集中』

会員の皆様には是非ともニュースへの投稿をお願い致します。中国語講座受講の感想など、中国旅行体験記など、その他の事でも大歓迎です。

<<入 会 案 内>>

つくば日中協会に入会ご希望の方は、事務局に会員登録票を請求し、記入の上、年会費と共にご提出下さい。

会費：一般：3000円、学生：1500円

賛助会員・団体会員：一口10,000円

つくば日中協会ホームページアドレス：

http://www.geocities.jp/tsuku_nittyuu/

中国写真館

云南之旅／雲南の旅（2008年8月 楊豪杰先生／楊豪傑氏撮影）

【その1】



① 少数民族村落



② 香格里拉松贊林寺／シャングリラ松贊林寺

【その2】は12頁につづく。

特別報告

～第9回中国植林緑化派遣団に参加して～

(2008/04/20 原稿受理)

つくば日中協会監事 飯田 茂

早春の3月28日朝は都合よく晴れだった。午前10時半、成田空港第2ターミナル入口のソメイヨシノは、8分咲き程度で、おそらく日本にいれば週末には花見になるにちがいないだろう。その8時間半後の午後7時に我われ中国緑化派遣団7名は、第9回中国植林緑化派遣団として、暗くなった北京空港に降り立った。

北京空港は新しくリニューアルしていて、めたらやたら広かった。到着して荷物をとるところまで数分構内電車でいく。外に出ると夜に春雨が降っていて肌寒い。吐く息が白く、急いで待機していたマイクロバスで以前の国際空港であった国内専用空港へ。海南航空で銀川市に向かう。夜8時過ぎなのにボーイング737型機は満席である。ビジネスマンというより少し金銭的に余裕のある人が帰郷するといった感じの人が目立つ。北京から2時間ちょいで着いた。当方は、機内では落ち着いた状態になった時から本（「中国激流」-岩波新書）を読んでいたが、この時は成田で買った雑誌（中国NEWS-5月号）のページを繰った。詳細を記すゆとりはないが、「出稼ぎ農民」の記事には興味をひかれた（4月1日の晩だったか北京のホテルで観たテレビでもこの種の話が放映されていた-後述）。

翌日、寧夏回族自治区の人民政府や中共の要人の臨席のもとに盛大に「2008年春季寧夏鴨子蕩水库生態緑化示范林項目启动仪式」（寧夏鴨子蕩ダム生態緑化模範林プロジェクト起工式）の式典があり、主な参加団体（者）は、党や人民政府のほか、交通庁、水利庁、地震局などの公共機関、北方民族大学など教育機関と多くの小学生から大学生、採油工団、石炭集団などの生産団体、農民、人民解放軍や警察まで、あらゆる階層から4,000人の人々がこの地集った。ここで、最高責任者中共書記の陳氏は、「寧夏の植樹は、黄河の水をここまで引き上げることができやと苗を植えるまでになった。砂塵の吹き荒れるこの地に植林できることは生態環境上重要な意義がある」と話した。また、我々の派遣団を代表して佐藤団長は、「第9回にわたる日中の植樹は一本一本植えながらやとここまできた。環境問題と平和問題は地球規模で考えなければならないと考えられる。きっと生態環境は変えられると信じてやってきたし、これからも協力していきたい」と話した。

世界4大文明の一つに数えられる古代文明の発祥の地・黄河下流域。その黄河上流に位置するこの地域は降水量が少ないことから太古より水不足に悩まされ続けてきた。この生活環境を少しでも解消するために黄河から水を引き、ダムを建設し（鴨子蕩ダム）、それを生活用水や農業用水など産業用などに使おう。そして、いにしえからの多くの戦乱や薪炭材に代表される森林の過伐採、過開墾や過放牧（内モンゴルに近く羊等の放牧が盛んだった）などにより植生は完全に消滅し土壌流失は加速され、もはやこれ以上の破壊は許されない限界まできた環境をなんとしても変えねばならない。そのために、たくさん木を植え、緑豊かにしながら、併せて公園や農地を造成し、生態環境を往時の自然環境に戻し、用水の利活用とともに地域住民の生活に役立たせようとする、将来に向けた、熱意と年月をかけた比類なき壮大なプロジェクトなのである。我々の列には小学生とおぼしき児童が「日本青年代表」のプラカードをもっていた。約30分少しで式典は終了し、植樹に移った。

この土は、おそらく日本にはみかけない白褐色をしていて幾星霜の風雪にさらされた特有の固い土壌で、なかなかスコップが入っていかない。春とはいえ気温は低く風が強い（気温10℃前後、平均風速約12m/s）。黄土高原（海拔1,000m）と呼び慣わされている砂漠化したこの地方は、年間降水量は400mm程度で、この時季は晴れの日が続いているものの、乾燥地帯で強

風が吹くため、晴れていても太陽光線は黄砂によって相当減殺されてしまい暖かさは届かない。当方は、ゴーグル、マスク、耳栓とひも付きの帽子を着用して防備する。黄砂は、地上を吹きまわり、容赦なく、穴という穴、隙間に入り込み、皮膚にはひっ付き、人々の体にまとわりついてくる。それだけではなく、おそらく生活にも大きな影響を与えているにちがいない（特に水については節水を余儀なくされ、洗濯物にも腐心しているのだろう）。数千年～数百年にわたる自然からの緑の強奪は、こういう形で幾世代を越えた我々が報復を受けているのである。黄砂は薄めの褐色を呈し、粒子が非常に細かく風に飛ばされるので意外と表土上には積もっていない。この地に、以前、地上部・数十cmの灌木らしき木を植えた形跡があったが、育たず、枯れてしまったので、今回は樹高2mを超えるポプラの木にしたのだと容易に想像がついた。

今回の植樹で気がつきましたが、大きい木にしては樹間が狭く密植に近い。これが見事に根付き（活着率80%としても）、十年もしたら、それこそ今度は間伐の心配になるのでは、と思うほどである。それと、根を切りすぎているのではないか、ということ。植樹どきは、光合成活動を促すため地上部は、ある程度剪定するのは分かるが、毛根以外にも太い根を途中で切断してあった。根は大部分を残しても良かったのではなかったかと思った。その上、根に土は付いていなかった。これで大丈夫かと少し不安になった。

午後からは、それほど遠くない石嘴山市に移動した。この市にある星海湖は、独特の湿地帯を形成し、景勝地としてつとに知られているが、近年の環境変化により周囲の生態が悪化してゆくなかで、市や関係団体の協力で植林事業をもっていくとめようと考えられている。その起工式である「星海湖生態緑化示范林項目启动仪式」に参加（総数1,000人足らず）した。式典のあと、記念碑を背に記念写真を撮った。偶然、横をみると30人位の学校のクラスが女の先生と一緒にいたので思わず聞いてみた。すると、5年生で12歳だそう。全員が日本は知っているかと答えてくれた。時間があればもっとコミュニケーションがとれていたのに、ちょっと残念だった。ここでの主役は、何とんでも小学生たちだ。共青团の湯さんは、「小学生にとって、自分たちの将来に向けても、環境の大切さを教育の一環として取り込んでいくことは、とても重要であるので、今後もカリキュラムの柱としていく」と話していた。

ここでの植林の樹種はポプラだけでなく樺の木も植えた。ここは砂質土で、さらさらしていて、とても扱いやすく、水もすぐにしみこんでしまう。

夕方、ゴミ捨て場だったところに池を作り、芝や灌木を植えて、みごとに公園として甦らせた「人民公園」を一周したあと、星海湖西側へ向かい、市の幹部から「43haにも及ぶ湖とその周辺の経済は市の重要地域になっているので、将来的に希望を持っている」と説明を受けた。この近くで、50歳を過ぎたおばさんたち数人が苗木の手入れをしていた。ガイドさんの説明では、おそらく市から請け負った農業サービス会社のアルバイトで、賃金は1日せいぜい50元（約750円）くらいではないかという。

中華民族の象徴であり、国民から「母なる河」と親しまれる、中国第2の河川、黄河。青藏高原を源流とし、5,400km余りの雄渾な流れを誇るこの川を前にして、NHKの「大黄河」を思い浮かべる。黄土高原の乾燥地帯を流れる黄河は、やはり民族の「生命の源」なのである。3月30日午前、黄河すぐそばにたてられている水利場に行き、黄河からの水をポンプアップする様子を見学した。黄河からの水を数か所に分け、人々の住んでいる集落に揚水していく。この中国でも拠点の水利場はコンピュータ管理になっていて、一目で流水、貯水量がわかる。揚水ポンプは数年前にオーストリアから運んだという大型機械が3台据えられていた。すぐ横を流れる黄河を機場の2階から俯瞰すると、上流からの黄砂が混じった黄褐色をした濁流がゆったりと流れている。黄砂は下流に向かうに従い川底に堆積し、黄河は天井川となり、たびたび大洪水をくりかえしてきた歴史があるが、年を追うに従って流れる水量は減ってきていると、水利庁の管理者は嘆きつつ、20数年前は水位がもっと高かったと、対岸の遠い土手内の木々を指差し示す。これを飲料水にも使うのだろうか。小生の感覚からすると、見た目では、とてもじゃないが無理である。はっきりいって濁流そのまものの流れなのである。そういえば、銀川市の幹部の人の話では、乾燥地帯であるがために、生活用水にするために水のやりくりが大変で、市の財政を相当圧迫している。そうかといって、市民からこれ以上水代を徴収するこ

とは無理があるので何とかしなければならぬ。頭の痛い問題だと、ため息とともに慨嘆していた姿が脳裏をかすめた。

午後は、西夏王陵参観で、ひとときの休息タイムとなった。「西夏王朝」は、1038年に建国され、190年足らずで、かのチンギスハーンに滅ぼされた歴史がある。地理的には北に「蒙古」、東に「金」、南に「宋」と「吐蕃」といった群雄割拠の時代である。現在の「寧夏回族自治区」という行政区の名前は、安寧に暮らせるようにと「寧」とこの約1,000年前の建国時の「夏」からつけられたという。砂漠地のなかに壮大な西夏王陵は屹立し、その威厳さは、まるで、今でもこの地の王であることを誇示しているようであった。

この夜、ホテルに帰り夕食後、所在なくテレビをつけてみた。各省にテレビ局があるのでチャンネル数は数十を数える。当然、どのチャンネルも中国語での放送であった。ニュース、スポーツ、クイズ番組、アニメ、お笑いに活劇と盛りだくさんである。何気なく見ていたところ、1つの番組に気をとられた。貴州電視が制作した農村が舞台のドキュメンタリーであった。途中からであったが、貧しい農村の実態が放映されていた。遅刻してくる子供がいて先生に叱られているところだった。叱られているのは小学生の姉と弟で、身なりはみすぼらしく学校まで片道3時間かかるのでいつも遅刻している。家族はほかに老祖父・老祖母しかいない。父母は遠くで仕事をしていることからいつも家にいない。小さな畑を耕してきた老祖父はいう、貧しいので学費が払えないし、食事も満足に与えられない。食べているのはいつも紅芋ばかりで栄養不良になっているのがとてもつらい。このことは学校の先生もよく知っていることだという。学校の先生と相談しているがよい解決方法はまだみつからない。先生の困った顔が印象的だった。こういう番組が放送されているとは考えられなかった。見方によっては、政府の無為無策を宣伝しているようなものだからだ。それにしても、まだこういう農村が中国には存在するのだと改めて驚愕した。以前、中国は、「4つの現代化」を唱導し、科学技術の発展していく姿が中国の道であるようにテレビなどで宣伝していたことがあるが、辺境の村は厳然として遍在しているのだ。3年ほど前に見た中国映画「山の郵便配達」をイメージさせる。ある資料によると中国では人口の約6割は農業従事者だという。そういう実情からか、農村や農業に関連した番組が日本に比べ多い。もう詳述するいとまはないが、4月1日夜にも黒龍江電視制作の新農村建設（いわゆる三農問題-農業、農村、農民の抱える問題。中国では農村地域にすむ農民の所得は低く、農業生産での増収は困難を極め、都市-農村間の貧富の差がますます拡大する一方で、農民は社会保障の権利もない実態を改善するために全国的に新農村建設を進めている）に奮闘する若者の姿が活写されていた。

3月31日、この日は、朝早く中衛市に向かう。中衛市は、ホテルから220kmを超える南西部の都市で、トンゴリ砂漠（騰格里沙漠）の東南端に位置する。中国中央北のこの地方は、今時分の1日の最低気温は1℃位で、朝は寒い（最高気温は15℃くらいにはなる）。

高速道路が街から郊外に抜けていて、我われは、マイクロバスで疾駆していく。走行車は、ごく少なく、時おり工事用車に出会う程度である。荒野の木々や草たちにとって、まだ春浅く、わずかにレンギョウのつぼみが無味乾燥な風景に彩りを添えているほか、狭小な面積（1a～5a程度）に区切られた褐色土の畑には黄緑色の小麦のわずかな萌芽が眼につく。近くには、5～6戸程度の零細集落が見えた。レンガ造りではあるが、台風は来ないし、雨が少ないので、華奢な作りで、いかにも田舎家が点在しているといった様子。電気はつうじているとガイドの朱さんというが、砂漠化しつつある黄土高原で、どうやって暮らしているのだろうか。近くに商店もなさそうだし。この辺の農村は、まだ一般的な貨幣経済は入り込んでいないと見た（さきの三農問題の最たるものか）。日本の1960年代、いや1950年代のころのようか。こういう所をみせられると、中国はまだ発展途上国であることを実感させられるのだ。ガイドの朱さんによると、冬季は三大野菜（白菜、大根、馬鈴薯）を地下に埋めておき、必要に応じ掘り出して食し、ビタミン類の不足を補っているのだという。やはり、自給自足の生活が基本のようだ。やがて、ビニールハウスの連棟が見えたので聞いてみると、数年前から財力と技術力のある農家がビニールハウスで葉物野菜類を栽培しているのだという。また、寧夏回族自治区だけではなく、ときたま植林してある地域にも出くわすことがあった。ここは、中国では一

番小さい「自治区」である。回族が住んでいるということから豪華絢爛たるイスラム寺院もみえることがある。ガイドさんの話では、この寧夏回族自治区は、560万人の人口だが、そのうち回族は190万人ほどで、宋代のころから度重なるいくさによって、南部地域から追われて、ここに来たそうだ。「馬」姓さんがほとんどで、少数民族には近來のひとりっこ政策は適用外で、2人まで子どもは持てるそうだ。中国では、戸籍は警察が握っていて、現在でも都市籍、農村籍は異動できない。（しかし、小生が聞いた最近のニュースでは、試験的ではあるが、農村戸籍の人が「民工」（早い話が出稼ぎ）などで長年都市に住んでいたり、子どもが大都市の有名大学に進学できたりした場合にのみ都市の戸籍がとれることがあるというニュースを聞いたことがある。最近、日本の大手新聞でも「民工」がとりあげられていたことは記憶に新しい）。

約2時間半かけて現地に着く。「中生态绿化示范林第三期项目启动仪式」に参加した。ここは、聞きしに勝る黄砂の発生源ともいえる、砂漠の舌の先端である。太陽は確かに出ているものの、空中の砂塵に遮られ光は真っ当に地上に届かない。「春のおぼろ月」ならぬ「おぼろ太陽」である。そういえば、寧夏に来て以来、日本で見る澄んだ青空はない。ここで、詩人高村光太郎の「智慧子抄」が老脳に去来した。その上、タクラマカン砂漠の方から吹いてくるのであろうか、激しい西風である（おそらく風速は15m/s以上は、ある）。だから体感温度は6℃か7℃くらいにしか感じられない。荒野に吹きすさぶ砂嵐のなか、式典は続く。ここでも我々の仲間が1人ひとり紹介するが、風のせいで声も飛んでいく。その中に地元の小中学生たち約1,000人の眼は輝いている。逆風にめげず旗を持つ手にも情熱が感じられ、頼もしく映る。今日の日がどんな日で、何をしなければならないのか、自分たちの役割を十分認識しているようだ。いや、何も今日だけに限ったことではあるまい。これから、この風土に生きていこうとする姿勢、みなで自分たちの住んでいる環境を考え、生態系を変えていこう、未来につながる前向きな行動こそ将来の自分たちの生活をよくするという確乎たる自信が漲っているようだ。式典後、植樹となったが、強風の中で、これが自然の姿なんだと、自分自身にいい聞かせながら、スコップで土を寄せる。写真を撮る余裕はない。子どもたちは、嫌がりもせず、テキパキと作業に励んでいる。あまりの悪条件のなか、長い時間ではなく、あとは地元の人たちに任せましょうという声に反応し早々に引き上げた。たとえ気象条件が良くなくても、植林のためにここまで来たわけだし、大勢の人たちとともに緑化のために共有できる時間がもっとあるべきではないかと感じながら、帰りの車に乗り込んだ。車内は窓を完全に締め切ったはずなのに、細かい砂が入り込んでいた。少しの時間なのに顔の表面のほかにも耳や鼻の中まで細粒が進入し気分は沈む。車内で、ガイドさんに黄砂の飛来状況を尋ねたところ、銀川市市内に舞ったのは、3月に1回だけで、これから4月以降が本格的な黄砂の舞う季節だという。日本でも、環境省黄砂飛来情報や黄砂情報提供ホームページ（気象庁と環境省の共同）があり、見ることができるが、4月19日現在、観測なしである。

お昼は、中衛市の4つ星国際ホテルで党や人民政府のお歴々をお迎えし、盛大に行われた。記念品の交換では、中国の方からたいそうな書物を各人いただいた割には、こちら側からは成田空港で買った洋酒。何か申し訳ないような気がする。小生の右隣は女性の副党書記で、左隣は副市長さんといった塩梅で、同国人同士になることはなかった。どの歓迎会の席でもこういう形であった。たぶん外国のお客様をお迎えした時には、こういうスタイルになるらしい。ご両人さんともカタコトの中国語で話をしたが、「白酒」（アルコール度数54度）をしたたか飲んだおかげで、とんと記憶がない。かすかに覚えていることは、「あなたの中国語はわかりますよ」といつてくれたことと、副市長さんは「6日間といわず、ずっといてほしい」といったようだった。それにしても、あちらの要人さんはお酒が強い。要人さんは1人ひとり乾杯にやってくる。そのたんびにギヤマンの中国製ぐい飲みになみなみつがれた「白酒」を飲み干し、完全に飲み干した証にその中国製ぐい飲みを逆さまにして相手に示さねばならない。小生は、乾杯の前にいつも「为了中日友好」（中日友好のために）を付け加えた。ひとまわりすると、またやってくる。これが中国式とはいえなんという宴会だろう。だんだんと盛り上がってくる。そのうち、見事な声量の持ち主が歌いながら会場に入ってきた。あとで隣席のご仁にそれとなく聞いたら自治区の文化局長とのこと。暫くすると、小生の近くにやってきた。酔っぱらって

きていたので躊躇することなく、小生は委細かまわずその人と歌ってしまった。1曲目は、「北国之春天」（あの千昌夫氏のミリオンセラー「北国の春」中国語バージョン）。しかしながら、サビの部分が小生の覚えている歌詞と少し違っていた。まあいい。次は、中国民謡「草原情歌」である。あやや、これもビミョウにちがう。ここまできたら最後までと思い、完全にケツまくって歌いまくった。終わって、およう、みなさんから万雷の拍手を浴びてしまった。外交辞令でしょうが、うれしいものだ。帰り際には、それぞれ握手したが、ここで、「一定、再回来」（必ずまた来ます）といって、さよならをした。だんだん眼が回ってきた。昼酒はきいた！マイクロバスの中では、当然、同行のみなさんグロッキー状態だった。

午後といっても3時過ぎ、ホテルのある銀川市に帰る途中、「紅寺堡生態緑化示范林項目」（紅寺堡生態緑化模範林プロジェクト）を見に行く。数年前、植林した樹木は、みごとに林となっていた。ここで、我々一行は長年農業をしながらこの植林事業を見守ってきた老人に会い、労苦をねぎらい感謝の言葉を述べた。彼は、人なつっこい笑みを浮かべながら、これに応え、歓待していただいた。ガイドさんと何やら話しているが、なまりがきつくて聞き取れない。帰り際、地元でとれたという果実（中国梨のような味だった）までいただいた（ホテルに帰って食べたが、味は甘みがなくイマイチだった）。

夜は夜で、当地のお偉方からのご招待の「联欢会」と相成る。だいぶ「白酒」に慣れてきておいしくなるから、人間ってのは、うまくできてるから不思議だ。今回の食事は、当然ながらすべて中国料理であった。

朝食は、毎回「自助早餐」（バイキング）で、十数種の料理が出る。小生は、よく、あずきとか、きびのおかゆを好んで食べた。「馒头」（あんのはいっていないまんじゅう）も結構いけた。3日目の朝、朝食会場でチャイナドレスをお召しの妙齢の「小姐」（お姉さん）に「油条」（中国特有の揚げパン）を食べたい旨言ってみたが置いてないという。昼食、夕食ともに脂っこいものが多いし、以外と野菜類も多いが生野菜サラダはどこにもなかった。唯一あったのは、にんじんときゅうりをスティックにしたものが数本あったのが1回だけであった。また、夕食（といっても宴会）前、ガイドさんに「涮羊肉」（羊肉のしゃぶしゃぶ）を食べたいといってみたが、これもないという。もちろん「餃子」はなかった。しかし、概して食事はおいしかった。前にも触れたように、ここは回族が多いので、当然豚肉はこの食卓にもでていなかった。出された料理のなかでは、特に、羊肉のモツを野菜と一緒に煮込んだものは格別においしかった。また、この辺りは養殖業が盛んで、料理にもよく出た。例えば、じゃがいもと一緒に煮込んだ魚料理は、小骨が多いものの、クセはなく、おいしく食べられた。

今回、はからずもこの緑化派遣団に参加させていただいたことに対し関係者各位に感謝を申し上げたい。これで中国行きは3回目であるが、過去2回はいずれも観光であった。帰ってきからの第1印象は、中衛市に代表されるように、寧夏は黄砂のすごい所だったということ。そこでの5日間で自分は一体何ができたのだろうか。各種の式典や植樹に参加したといってもほんのわずかな時間だった。後になって考えてみれば、もっと植樹をしたかったし、すべきではなかったのかと、改めて感じた。

繰り返しになりますが、一体何のために中国までいったのでしょうか。式典参加が多く、植林作業の時間は思ったより少なかった。歓待の受けすぎの感がある。中衛市では「公安車」（警察のパトロールカー）での先導は、まるで貴賓客だ。ほかのところでも似たり寄ったりだった。これで本当の友好が続くのであろうか。我われはお客さんではない。ともに地球上の環境を憂える同士ではなかったか。民間人同士の草の根友好を標榜するのなら、もっと地元の人たちとコミュニケーションをとりながら、ともに植林したり、一緒に生活する時間があるべきではなかったか。そうしてお互いに認め合い、対等にお付き合いしてこそ友情が深まるものであるといっちは理想論にすぎるのであろうか。しかし、短期間ではそのことがかなわず終わってしまった。これまでの行ってきた「緑の架け橋推進センター」による「中国植林緑化活動協力事業」に中国側が敬意を払っていることは身にしみて感じたが、それにしても平常以上の「联欢会」（歓迎の宴会）等であったと感じたのは果たして小生だけであらうか。

それと行く前にもう少し学習していくべきだった。中国の植林活動はどこまで進んでいるのか。我々の団体のほかの活動状況はどうなのか。労働組合レベルでいったにしても（小生の組合は旅費等経費の半額出してくれた）、もっと植林以外にも、ほかに行えることがあったような気がしてならない。例えば、中国の現地のかたがたとの話し合い（植林してよかったことや今後の課題など）をしたかった。「退耕還林」政策（注）がどこまで浸透し、目標に対しこのあとどれくらいの面積が残っているのか、聞いてみたかったこともある。

ここで「貴重な体験をしました」あるいは「大开了眼界」（大いに見聞を広めた）という次元で締めくくってしまってもよいのだろうか。いつきの感動に浸っただけでは時がたつにつれ忘却の河に押し流される。自分にこれからできることは、より多くの人たちに現地の実態を知らせ、それら友人たちとともに何度でも植林に協力していけるよう努力することが必要なのではないか。隣人のために、そして何より自分のために。そのために一歩ずつでもあきらめず、もっと中国の地歴や語学に磨きをかけていくこと、地球環境問題に関連する中国の事情とこれまでの到達点や今後の課題など学習すべきことなど、たくさんあることがわかった。これをきっかけに、これらのことを再認識したことが最大の収穫だったのかもしれない。

（注）「退耕還林」政策…傾斜地等にある農耕地を森林に転換させる政策。1998年に約3,000人の死者と約3億人の被災者を出した長江の大洪水が契機となり、河川流域での森林保全が改めて注目されるようになり、「退耕還林」政策が始まった。このプログラムによる植林面積は1999年から2003年までに1,333万haに及んでいるという。なお、詳細は、「農業経済研究」

（第78巻第4号、2007年3月）（日本農業経済学会）の「中国の『退耕還林』政策が農家経済へ及ぼす影響」論文（鬼木氏ほか）p174以降を参照願います。

中国写真館

云南之旅／雲南の旅（2008年8月 楊豪傑先生／楊豪傑氏撮影）

【その2】



③ 麗江古城の街道／麗江古城の町並み



④ 洱海天鏡閣／洱海の天鏡閣



⑤ 石林



⑥ 崇聖寺三塔／崇聖寺の三塔